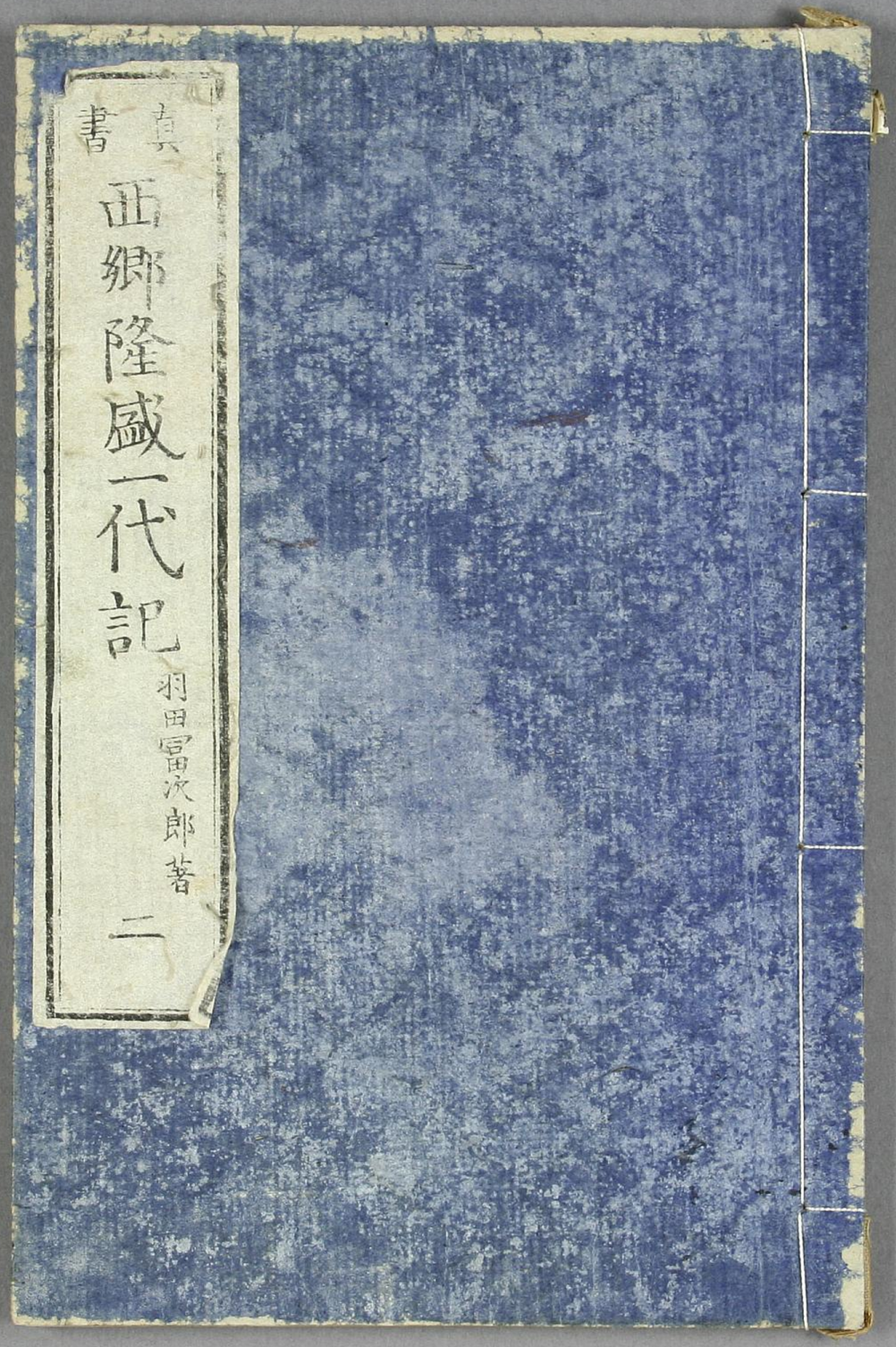


真書

正卿隆盛一代記

羽田冨次郎著

一

A446
2

去るべ重助ハ吉之助を伴ひて我部屋のうちふ
居を越うさの物語りをなさんと思ふものうら
又もや主人ふ呼ろ〳〵侍是非なく奥ふ走り行跡
ふ壹人り吉之助ハ土瓶の下の火を吹おこし待
間程なく重助ハ主人の用事果ふけん奥のうさ
より立戻り吉之助ふ向ひて言よふ今日ちらら
ども御目ふ拙りあるゞ振り去て伴ひても我身
の體さの奉公人主人の用事多き故去みゞ咄し
も仕らば嘸や粗略とおぼをらん見免したまひ
若且那も早や初夜過るとべ主人の御用もふ

羽田富次郎編輯
村井静馬圖画

真書

西郷隆盛伝記 二

明治十一年
二月發兌

浦野氏板

方果るん是ら先ハ我が體ゞ僕を一寸通りま
で私用を達ふ為るゝ等しの程が留守居して
たまゝ〳〵と重助ハ言捨てこそ出行も何ら
る饗應致さんづゝ家たいふ責ぐ下煮めを竹の
ゝこふて求めゝ〳〵こるゞら酒をゝこへふさげ
足早やふこそ戻り〳〵うゞ吉之助ハ頭べを返し
重助を見やりつゝ昼ハ主人の御用の多く無や
御身もくゝびもつらんふ今又夜中ふ及びし迫
何らの用事ふ行をしやと問を荅へて重助いふ
ようさゝべとよ外ふ用事もあらざれども今宵

もゝや初夜過るふ夜食ともも参らそひま
るゝ君虚腹ふおさそらんと思へど奥の用のこ
多く延引ふこそたべりゝ〳〵〳〵土瓶のふ
たゝりて酒暖めるうん徳利口の當りもうけて
ある剥て揃ゝぬうつゝとりの拭ひゞゝせね脚附
の折敷の縁ハ離まてる繕ひのゐき白杉の洗濯
箸も時ふあふ春のゐづけハ君ゞ爲野ふこそ摘
ねあゝせ物数ふ向へてゝり添ていざこそやゞ
てもて出てうゝ〳〵〳〵ゝへついざめしま
せと重助ハ進めふゝまゝバ吉之助ハうち見やり

掛る手もなく住居して斯迄御身の世話となり
しハ某し心のなさに似さりなく打捨て置さま
ひとしきを重助うち笑ひいうでう馳走を仕ら
ん心斗りのとなりたのさ一口召ませと進めハ
任して吉之助ハ盃をとりあけつ後ハ両人盃を
右左りハ廻らして酒酣ニハ及び時吉之助ハ
重助ハ向ひて言よハ凡人として悪事ハハ一も
とりくども立寄るべうらぶ小善と雖捨へらぶ
人何をとをう走りて知る人ハあハ事ありとうハ
を某し古郷を出てよう知る人ハあハと両三度

今又東ハ入と等しくもうらぶ御身ハ廻り合掛
るめくるハあハとのいと不思儀さハ御身がう
へなり國元ハあるなれば何不足もあらざうし
ハ今又遠く東ハ来り此家のうちハ奉公せしハ
定めし様子のあるとならん聞まゐ去と問ひ
なれば重助ハとく頭べをうい撫君もうねて去
ろしめを大旦那吉藏様ハも禁が緑者ぞうんの
節ハ厚く御恩ハ預りて田地の程もと故なく禁
う方ハ手ハ入ど扱摩が罪のうしりハや二年跡
の秋といハ親子ど上の長の煩ひ稲メト業もうち

捨て親子四人が藁りざんまい命拾ひハ致しさ
ゐもど痩田もちゐろ〳〵賣尽し家内も今ハ煎じ
つめ親子の者が相談ふて我ハ手足も達者とゐ
もび両三年も東ふて奉公ゐしさ其うへふて兎
ふも角ふも致さんと子供貳人ふ跡を任せ我ハ
去年の冬より〳〵て此慶ふ赤りて中間奉公兎角
幸ゐ死とのみ多く打續きたるふし合せと語る
を聞て吉之助ハ歎息ちつ〳〵答るよふさまで苦
敷ゐ思ひゐもふゐ人間萬事齋翁が馬とし聞べ
七〻ころび八おきくいくるさとひもあり禍ひ

あもハ福ひあり世の盛きいハ是非ゐしとふ
を聞より重助も又問ひうへしつ吉之助ふ君も
東ふ越もしハ是も又様子のあるとゐふゐ聞ま
ゐ〳〵と問ゐもび吉之助ハうゐづ死つ某しと
ても御身と同去年の冬ふ父を失ひ幼き妹を縁
者ふ預け跡ハ貳人の兄弟ふ宿を頼ゐて遥くと
壹人り東ふ下り〳〵も某〳〵武士と生も薩ア
の方ふて生外を拓果ゐんも便ゐく思ひ東ハ諸
学の名誉あもび是ふ便りて修行をゐさんと遠
く江戸ふ下りふきと聞て重助感心ゐ〳〵そハみ

めよりの御心意先ふもいくる此家の且那下條
様ハ和漢の文ふうとしと常く僕聞さまべ君
も明日より近付ゐりて言葉うさきふゐしさま
へと絶て久しき對面ふ過越方の物語り咄さも
長き短うさハ春の夜早く更やすく子よとの鐘
ふ驚うさ也重助ハうさらより天徳寺とう唱
へけう夜るの物をとりのべう君も無やくさび
れつらんらく夜も更ゐる侭早寝まりたまひ
ねと進めふ任して吉之助ハ然らべ免しうさも
よと枕ふ付べ重助も供ふふ戸ふ入ふけり時

ふ春の夜明やすく鶏り明日を告まべ重助ハ覚
出て奥の方ふ走り行水仕女を手傳ふて朝食の
仕度ゐどとのふおりうら主人通信の覚出る
を見て重助ハ手水の湯をとり出し主人ふ御機
嫌を伺ひて夜前吉之助を伴ひて我部屋ふ一宿
させしを咄せうべ下條も又誠心ある者ゐり
せべ其事を聞よりも是又念の入たるゐんぢが
言葉同國の者とあるうらハ何の遠慮ふ及ぬん
や遠路を遥く越まつ御人定めて今日もくさび
まつらん幸ひ今日ハ寸日をへ愚良も少しのひ

下條通信
西郷吉之助を
饗應す

まあとは其御人は對面なし薩州の國の珍說を聞まゝ〳〵とゝ〳〵をれは重助聞て打悅ひ然らば仰せは隨ひて我國人を伴ひんと吉之助を引合せければ互は初對面の挨拶終り下條は吉之助が相顯をつら〳〵見るは色白くして眉秀て金骨逞きゝして身丈六尺を過ぎり辯舌とゝ〳〵ぜんとしてりうがをさ〳〵がごゝ〳〵なるべ天晴一固の武士なりと感心なし此人必ずしも後年は至られ天下は名をとどろかる人物ならんと下條通信が眼力も又恐べきことなりとぞ去べ其

席は及び下條吉之助をして饗應なさんと酒肴をとり寄て盃を順逆は廻らせ折玄関は周章して駈来りたのゝしきるの聲きけは取り次出て其故を聞は兼ての病家日本橋浮世小路中村何某の使い来りていはく兼て願ひ置候主人娘ごの養躰夜前とは外なる乱氣はて家内もりてあすし候侭至急御足労なるも先生は是非とも御見舞下さる度と主人よりの申傳へと言捨てとそ戻りぬ斯て取次の者はとのまを主人下條は傳へしはべ通信聞ゝて真面はしをよせ等し況吟な

もものうら吉之助ハ傍ふ有て其故を問ふふ
通信のいくるるよふ君今おしも聞きしどく
我病家でありけるゞ中村何某といくるハ町方
の長なりしゞ彼元来貪欲ふして已ゞ支配を潰
潔家富榮るといくども萬民を苦志もる其報ひ
ふろ一人の娘を侍といくども年十八九ふしてと
の程難病を煩ひ昼中ハ何の変りもなく常脉の
容躰ふて夜ふ入べ直ふ乱心なく碎てを以て當
りふなげ付我寢夜の邊りふ壹人も人を近付る
となく鶏い暁月を告夜明るふ及ていハ何の養

躰変りもなく食事とふも常脉よりよく進みた
るありさまなり愚良も年月醫道をなせど撰る
奇病ふ出合しとなく是ものたくりなるんろ
未ゞ其病元を知らぎと白地さまふも物語をべ
吉之助ハ始終聞て忽ちふ心の内ふ計儀をわく
らく誠ふ不思儀の病生ふる煩ふ者ハいくべさら
なり父母の悲ミいろなるん某一今糸りして大醫ゞ
差圖も待づして言ふあらねど何も修行の道なれ
べ先生ゞ代脉となりうるん其病女を見聞なるべ
某しゞ家土産の咄しふもなりなん願ふくハ大

醫御足を労せぎゝ某しを遣さるゝと好くゝ任して通信ハ其日吉之助を代脉とゑ下僕重助を供ゝなし浮世小路ゝ遣しけり斯て吉之助ハ彼病家ゝ至り案内して坐敷ゝ通りしゝば茶煙草盆を取り出し主とおぼしゝものゝ立出年の頃四十有余ゝして謙謐面謾の癖ものゝと見ゆるとも應答頗る念頂ゝ述しゝば吉之助も又礼をくゝ折ふゝ暗薫の香りふくゆくとして紅裙をひるがゝしゝて一人の手弱女徐くゝとして傍ゝ坐せべ主じ指差てりくゝ兼て下條先生ゝ願置候病者ハ則ち是ゝて此程神灸薬療を尽さるゝとゝども何の印もあらぎきて夜毎の乱氣いゝゝ絶さり君願らくゝば神慮をめぐらし娘ぶ病苦治さるゝゝ一編ゝ願ひ奉ると思ひ込ての頼ゝしゝば吉之助ハ先娘ぶ脉をとりて暫く考うるゝど脉躰常ゝ変りゝ五躰ゝ邪氣あらざきば又面躰を想るゝゝ色青白くして目のうち涼ゆるといくゝどゝも常ゝ雨のうきひを含みて春情自ゝら顕き手足又ゝ若なれハ是正しく婬乱情弱の相貌骨客ゝ顕をしゝば吉之助ハ心のうちゝ思ふゝ是正しく婬婦夜隠ゝ更り

て密男を引入我寢夜の邊りに他の人を遠割んぶれめ作り狂氣に飛礫を以て人を拂ふハと可笑餘人にもあらず某〳〵は何ぞ婦に欺られんや今宵のうちは娘ぶ病元立所に見顯し父母ぶ歎ひを除てくれんと心に思ふものゝ一言を吐ざりしを主ハ案ドうん傍より娘ぶ容躰を問ひけれべ吉之助答へていふハ御主人必ぜしる案ぜるに及ぶ娘ごの御病氣ハ某〳〵今宵の内に全快させ掌をうへをうつ最安しとともゝ喜ばゝいくうをぶ主ト大ひに悅びて君

者婆ぶ再来うるや大醫でさら難生とまでいと
もしに斯手うるくのふいうるの見込の
候や〳〵君ぶ御家傳に名法良藥あらてのこと〻聞まゝしくと問ひけるべ吉之助ハ大ひに笑ひ某〳〵元より醫師にあらねバ家傳の良藥一服も且て用意いたしあ〳〵惣して病ひを治るにハ氣に應ド変に應ド病ひをたつぶ醫道の極意御主人一人のまゝ娘を本服させ度思ふゝら先御支配の貧者を集め施行数多を出〳〵まひて然して後酒肴珍美を取り揃ひ御主人持に及

中村の娘作り
乱気して密
男と通ひ家
内と驚らせ

んてハ某しゝ輩夜隠ハ及爰ハ来りて馳走とゐ
り其後御身ゞ娘ごの病ひを治するハ何の手間
ひまいらざるやとロろら出任せうゐくせど子
故ハ迷ふ親心ろ譫語面謾の吝嗇なれども子を
愛たこと他ハ越て娘の病氣直さんと吉之助戻
し後常ハうろうて費を厭だ近所ろ壁の者を雇
ひて俄ハ食をたろせ油揚のハゝめも常のゝら
きハ引うゝて流山の古味淋入ハ黄色あろく大
ざるのたゝうんの香のゐものハぎり食ともろと
りハ竹のうとハ入やら勝手のそうどう大うる

るらぎ爰ハ八町四方の貧者中村氏の施行の様
子早くも一同聞傳へ我先へ貰ろんと中村氏へ
皆迫り祖母よ女房よと食をあせりつゝろロ
のやと袋貰ひあさるうるとも鳥犬もまぢりて
如是蓋生法恵の程を有難ーと悦び合て皆一同
已ゞ家さして戻りけりさるとび吉之助ハ中村氏
ハ施行をいつゝけ猶其後山海の珍美を取り揃
へ待ハおよびふゝび来りて娘ゞ病氣をゐを
さんと約速のごゝゝ日もゝとハおよびーろび
吉之助ハ下條の家族二十餘人引連中村ハいる

らんとせしが所下條うち笑ひなごら止ていはよふ君何らの故んをうつて斯迫る中村氏ふさんざいをさしたるものや又先前代脉のせう娘ぶ病元君いらるる見込をなしたるものやといふを聞より吉之助ハ娘ぶ病氣ハ少しも労そるふあらず大醫をさしおき某しをわらがて言ふあるねど彼乱婦人ハ今宵のうちふ全快さるべし又大醫ぶ御家族常ふ美食ふハ欠といへども某しおるふ子細あるべ中村氏ふてさんざいハ大醫をうしも労しうるふ麁酒一盃もまいらせど

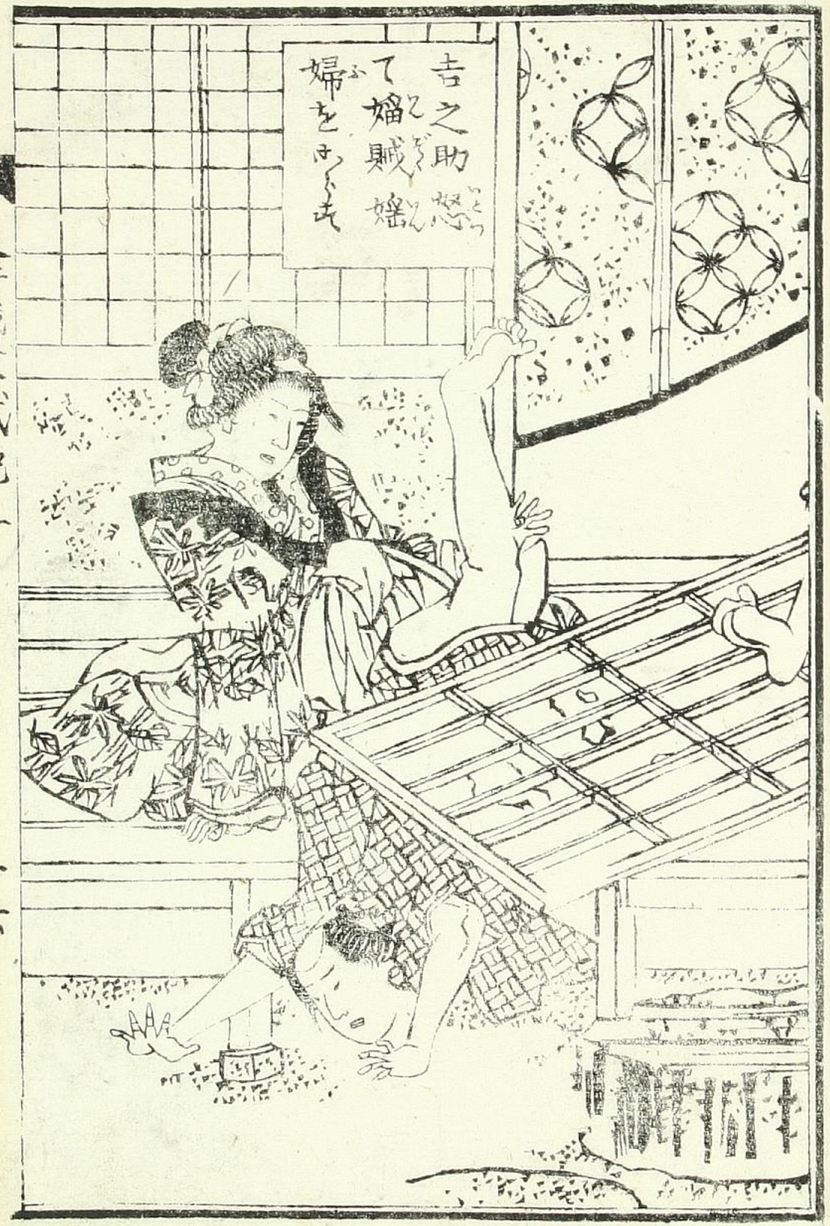
今暫く御不自由ふハ似うるとも御家族残を借さまひと吉之助ハ二十餘人を引供しつ中村差て急ぎうり爰ふ又中村方ふてハ吉之助ぶ言付ふて昼の程ハ施行を出し猶又夜ふ入ハ吉之助数多の者を引来り娘ぶ病氣を直さんと約速なるべ其用意取りしふて酒肴の珍味取り揃ひ所席まで置ならべ待るふくる時しもあるを吉之助ハ先ふ立数多の者を連来り先刺の挨拶おこり皆一同坐ふ付ば配膳を取りひろげ盃さを順迸ふ廻らしつ饗應一うるあらさるべ連来りし

者どもハ志らづハ好みるぎよいいよ〜悪迫ふ
喰醉ふ乗して踊りつ舞つきる程ふ吉之助ハ心
のうちふ可笑思ひ今ハ早おうぶんゐりと思ひ
りん吉之助ハ目くばせをなせば皆一同ふさ〜心
意一礼述て戻りけり斯て吉之助ハ〜〜一人跡
ふ残りて主じふ向ひ是より某〜娘ごの御療治
ふさ〜拵きば我一人ふてとりゐん御主人夫
婦ハ退きゐ〜と進めふ任され一礼ゐ〜寝戸ふ
こそハ入ふけりさるこらふ夜ハ〜〜と更渡時や此
方の外花垣さや〜とて物音茂く扨こそ婬夫忍び

〜と吉之助ハ身を起〜立んときゐば忽ちふ飛礫を
以て投るを雨霰の如くゐきば向んときるふ便りを
失じ然ゐども吉之助ハ元来心きたる者ゐりせ
ば儀ふありける四斗樽を見るより是を取りて
頭らへうむり娘ゐ寝間ふ踊り入見るふ〜〜て
密男居ゐば婬賊どさんゐきと遠臂を長〜三間斗も投
付きば庭の面ゐる飛石ふ頭ら討きて〜るゐ
つくを見むきるもやらぎ身をひねり飛拵りてハ
娘をば〜てとてふ誡めけり此物音ふ主〜夫婦
ハ大ひふ驚き火則燈〜て駈来り見ゐば娘ハ縄

めふ拙り庭の面ふハ好男子とおぼしき者の問絶
して倒し侍夫婦ハ見るふ覚束なく言葉世話敷
吉之助ふ其元末を問ひけるべ吉之助ハけんぜんと
して容を改め御主人おろしめさるや先ふ某し娘
ごの容躰を見聞せるふ是正しく生の狂乱ふあ
らぞして密男を引入他の者を遠さけんぶ為作り
乱氣と見込し故某し斯いろらいろり某し他人
の娘ごをして手込ふなさふあらねどる言語ふ
絶せし婦人のさようろい我聞婦人ハ幼けるよ
りつくしみを以て専一とき夫ふなんそや天性の

縁段をも待で私情ふ通じ父母の目を忍ぶのみな
らず作乱なして人をなやまし父母ふ苦労を掛る
段其罪最もうるさふあらぞ天我手を以て誡めな
まんど若氣の至り一且ふして其念をなち誤て改む
るふ何の憚るこやあらんといつて庭もせふ猜差
てりふるあるなる好男子人の生垣を破り忍び
入こそ大罪ふ似こそども此處ふ合手のあるこそ
こそ一人非なるとりふるあらぞ彼を此侭突出せ
も最便なきこそなるべ御主人爰を分別なし少らな
りとも金子を與へ手切となして追出さハ娘ごどの


吉之助怒て婚賊婚婦をはらす

の身のうくも跡の浮雲拭らぬ通り然思ひ玉ふぞや
とざつと嘆きつゝ吉之助が其教論ふ感伏なゝ主じを
初め一坐の者慚愧の眉ふ見へけるゞ主じハ早くも
坐を立て金子五両を取り出し吉之助ふ與へし
うべ其坐を立て男子ふ向ひ汝少うなるとゞも是
を以て早く此所を去るべし然猶やまざるゝ此後
ふ及ひ娘ど小私情を通じなべ其時とそへ某し再
び来りて汝ぶ首をちゆべしと跡ゝ迫も心を付双不
う落なゝ死取り嘆きハ花も實もある春の夜の明
方近くなりなゝべ吉之助ハ暇を告立んとなるゝ

を主じハ急ふ押留め君ゞ尊慮ふ娘ゞ病療るのゝら
此場の次第と故なくも治りしハ是皆君ゞ賜のふ
て御礼ハ言葉ふ尽さゞせめて今宵ハ一宿なゝ
明なべ戻り玉ふれよとひたすら留まゞ聞よ
しなゝ数多の者の馳走となりしを一礼述て暇を
云ひ下條差て戻りけり斯て吉之助ハ下條通信
ふ逢て昨夜の一五一十を物語り奴中村氏日頃支
配を潰滅年来貯つくし金子を遣ゞせんと某し
報辯を以て支配の貪者ふ施行を出させ非道の
金子を費ゞせしハ是輪廻應報の利ふあらぞやと

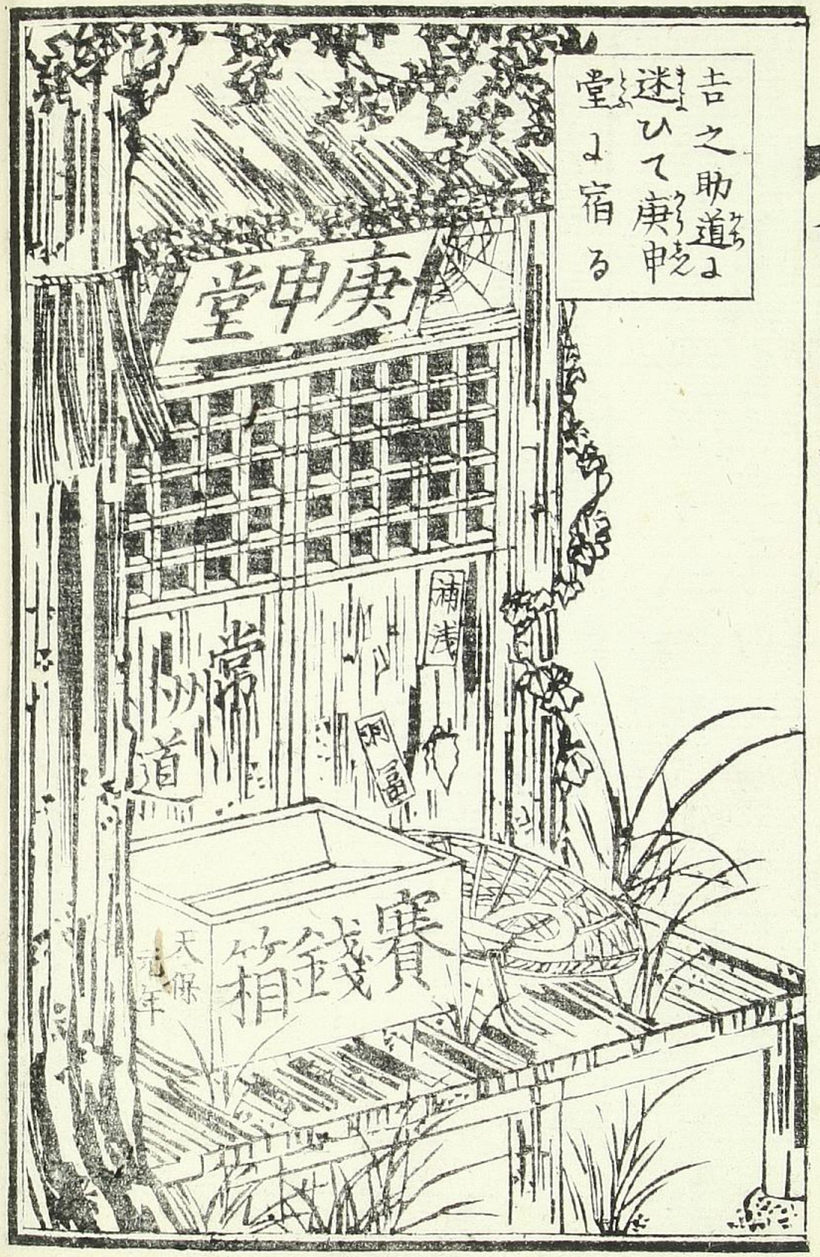
憚る所なく説けとべ通信聞て感心なる誠ふ君
ハ蓋世の義士なり彼天竺ガッカイ長者貪欲ふ
ふて宝を積七珎萬宝ハ藏ふ満ちども一人の娘奇
病を煩ひてなるゝふ絶えなり釈尊普瑠名を以て是を
説喩し善道ふ道引きあるもよりも君ふハ増るまゝと
其後吉之助を去て下條尊恭なるをとひとゝなる
らまをといふ
著者曰此一くだりハ西郷吉之助ぶ高を顕まその
みふて日本橋浮世小路中村何某ぶ娘親子の物
語りハ此末へふ絶へてなゝ

實ふ光陰の留まらぬ事走前流水ふ等〳〵昨日
今日と思ひしふ吉之助ハ下條ふ在て四五ヶ月早
や文月も立暮て八月中ごろなりしハ又思ひ返
をとふ爰ふ長らくあらんより常陸の國ふ趣ぶべ天
下ふ先達豪傑ありと風ふ聞ハ是ふ便り又〻
修行をせんものと心一ツふ一決なる下僕重助ふも
是迫世話となりなるべ其段厚く礼を述又りや縁も
あるなれべ重て合ぬと其明の朝下條ふも発足の
由を咄しふべ通信も吉之助ぶ修行のうへと聞ふふ
留るよりなるもあらされべあらぬ別をふ袂を別ちけ

り爰ハ西郷吉之助ハ西岸を立出てひさたら道を急ぎて水府の方ハ心差頃も秋の末なれば日蔭もいつゝ傍きて東の方をなぐむもべ山の端高く月さゝて野中ハもぐゝ虫の声露を乳房ハ撫子を根ハ添花も愛らしく旅のうゝをもはもと草おもと花とハ名ハ呼るゝうら見勝なる菖の葉のかつるさへ便りなる我もうちふて世を渡り桔梗の折ハ古郷へ鍔錦の藤袴馬追ひ虫や轡むし鈴虫の音も勇よく行んとさもべ日ハ暮て遠寺の鐘のうゝと物淋しくも聞なもべ吉之助ハ有もるずも指折うゝめて数なもべ子よと

の鐘ハ驚ろさもひさたら宿りを急ぐとさるハ終あやまちてあゝ引の山懐ハ踏迷ひ髣髴として傍らを見ろへもべ左も古びなる小社あり正面ハ庚申堂と三字を以て印しなる額中ハ朽て軒傾き千茅束下を通し丈よりも猶高く重むくら孤詩師を結廻り靡ず下ハ誰ぞ徒らハ印せしや常州山道とありしもべ吉之助ハ大ひハ悦び我あやまつて道ハ迷へど常州山道とあるうらハ何もハ致せ此所ハ水府への山道なるべし今更道を急げども里遠けもへ夜込て宿借楽ハ至らもべ今宵ハ爰ハ一宿なり明なべ道を急がん

吉之助道に迷ひて庚申堂に宿る



と社の扉ら押明て神ゝ向ひつ三拜ゐし行末武運長久を念ゝ終りて其後ゝ等しゝ程ハ眠ゝけり爰ゝ又其頃水戸前の中納言公各藩数多ありしゐろゝゐる藤田東湖先生ハ頗る天下ゝ名誉ゐる大家ゝて諸國より爰ゝ便りて筆性ゝ入者数多ありしゝゐろゝも挂小五郎とゐる者是長州の藩ゐりしゝ今藤田の門ゝ入生質天下ゝ先立の心あるや昼夜兵書を練と寝食をゐたれ他の熟と異ゐりてとの外出世ゝ及もゝ一日同居書生等ゝ進ゝ任せ同所岩井町福住屋とゐる遊閣ゝ登り各々合方を

010190508108

まゝき愉快大うるさらされども元より小五郎へ
拙るくうまくことを好ぎてことさら呑ざる酒を志いらま
て身心ままやうゆらされば其場を立て小坐敷のふくら
き所ふうち寝つ白湯とふべくうくと入やあらんと思ふも
のうら郎下當り去とくと歩み来る者とそあり年の頃
十八九ふして髪の銚り袷綾帯花やかふして皆當世の旨
ゝせさるハうく顔ハ弥生の花を欺き眼ハ秋の二星ふて常
小雨の恨雲のうもひを含み暗小風の情月の意を藏わ
御湯を奈ぎるとくつそと入来る者あり是小五郎と
此女ゞ物語りいうる因縁あるやそハ又次の巻小印をべし

明治十年
月　日御届

東京

賣捌人　福田熊治郎　長谷川町手番地

著人　平民　羽田富次郎　第六大區小區本所外手町二十二番地

出版人　平民　浦野淺右工門　第十二大區一小區寺嶋村四十五番地

賣捌人　平民　森屋治兵衛　馬喰町二丁目

賣捌人　平民　恵比壽屋庄七　照隆町